

令和元年5月22日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03720

研究課題名(和文)再分配選好に自尊感情が及ぼす効果

研究課題名(英文)The effect of self-esteem on redistribution preference

研究代表者

飯田 善郎 (IIDA, Yoshio)

京都産業大学・経済学部・教授

研究者番号：50273727

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、個人の自尊心と将来自らが得る立場に対する期待との相関関係、およびこれらの要因がディクテーターゲームの再分配選好にどのように影響するかを検証している。この研究では、課題を相対的に高いパフォーマンスで達成した被験者にディクテーターとしての立場が与えられた。ローゼンバーグ自尊感情尺度(RSES)によって測定される高い自尊心を示す被験者は、タスクが知能テストか単なるくじかにかかわらず、自分の得る立場について楽観的な予想をし、たとえ自分の立場が完全に偶然の結果である場合でも、自分に報酬を多く分配する傾向がみられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、自尊感情が高く、自分の将来に楽観的な予想をする傾向を持つ主体は所得再分配の機会を得ると利己的にそれを行う傾向が高いことを示すものである。例えば企業家や政治家は、自尊心をもち、事業で成功する、あるいは当選するという自信があればこそそうした世界に身を投じると考えられる。そしてそうした人々が経営者として従業員の所得を、あるいは政治家として所得の再分配策を決定する立場を得たとき、自身に都合の良い選択を行う可能性が高いことを本研究結果は示す。これは所得格差の構造的要因を示唆するものである。

研究成果の概要(英文)：This study investigated how the self-esteem of individuals and their expectations of future positions are correlated and how these factors affect redistribution preferences in the dictator game. In this study, subjects who performed better in a task were awarded the dictator position. High self-esteem as measured by the Rosenberg Self-esteem Scales (RSES) tended to predict better performance and therefore attaining the dictator position. The tendency was the same regardless of whether the task was an intelligence test or a lottery. Such confident subjects allocated the initial income primarily to themselves when they gained the dictator position. That is, individuals with high self-esteem were optimistic regarding their future and readily distributed most reward to themselves, even if they understood that their superior position was completely the result of chance.

研究分野：公共経済学

キーワード：所得格差 所得再分配 自尊感情 経済実験 ディクテーターゲーム

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

多くの心理学研究が、再分配選好と自己評価に関する心理的指標との相関を明らかにしている。それらの研究は、自分に肯定的な評価を与えている被験者や、自分を物事の基準に置く傾向を持つ被験者は、他者への再分配に対する選好が低いことを示している。

Iida(2015)は、ディクテーターゲームにおいて、自分が配分者になれると予想する被験者はなれないと予想する被験者よりも有意に他者への再分配額が低いことを示した。心理学研究の結果に基づいていけば、利己的な再分配のオファーをためらわない被験者は自己肯定感を強く持っていると考えられる。Iida(2015)の結果はすなわち、自分が他者に優越する立場を獲得すると予想しやすい人間は、自尊感情が強くて他者への配分を好まない人間であるということをも示唆している。

### 2. 研究の目的

上述の示唆は、現実の格差の問題を考えるうえで重要な意味を持ちうる。例えば企業の経営者は従業員の所得を決定する強い権限を持つ。経営者を目指してビジネスの世界に飛び込むものは、成功するという自信を持つものが多いと考えられる。政治家も当選するという自信があればこそ立候補する。いざビジネスに成功する、あるいは当選すると、経営者は雇用者の賃金を、政治家は所得再分配のプランを決定する権限を有する。すなわち、自分が成功するという楽観を持つ人ほど他者の所得を決定する立場に挑戦すると考えられる。そして実験結果が示唆するのは、そのような人ほど実際にその立場を得ると自分を厚遇し、格差を大きくする方向に向かわせやすいということである。これが一般的傾向であるならば所得格差が生じる構造的要因として指摘できるだろう。

このような、自己肯定感と将来予想、そして再分配選好の関係は実際に確認できるだろうか。これが本研究の主たるリサーチクエスションである。本研究は、Rosenberg Self Esteem Scale; RSES を用いて事前に被験者の自尊感情を計測し、そのうえで実験室に被験者を集めてディクテーターゲームを行うことでその疑問に答えようとしている。

### 3. 研究の方法

被験者は本学学生を対象にインターネットを通じて募集された。被験者は過去に同種の実験に参加したことがないかをチェックされ、問題がなければアンケートの Web 上のページで Rosenberg 自尊感情尺度 (Rosenberg Self Esteem Scale; RSES) の質問に答えるように求められた。RSES は、自尊感情を計測するもっともよく知られた尺度の一つである。被験者は 10 の文章に、自分が「強くそう思う」から「全くそう思わない」までの 4 段階で回答する。このため 10 の質問の合計点は 40 点から 10 点の間を取る。Rosenberg 自尊感情尺度を用いた研究は日本でも多いが、翻訳のばらつきの問題が指摘されていた。そこで本研究は Mimura and Griffiths(2007)が逆翻訳のプロセスを経ながら慎重に日本語訳を行い、妥当性を検証した (RSES-J) を用いた。

実験当日に被験者は実験室を訪れ、PC 上で行われるディクテーターゲームに参加した。ディクテーターゲームにおいて被験者は 12 問の知能テスト (RPM test) に答えるか、1/4 の確率で当たるくじを 12 回引くかのどちらかのタスクを行った。どちらにおいても高い得点を得たほうが配分者 (ディクテーター) となる。タスクが終了した段階で被験者は自分が他者よりも高い得点を得たかと思うかどうかと、このタスクで勝利するために運、努力、能力のそれぞれがどの程度重要であったかと思うかの質問に答え、また配分者になったらどれだけ配分するか、逆に被配分者になったらどれだけ配分を求めらるかを答えた。そののち、タスクの成果に基づいて決定された配分者と被配分者の役割が被験者に明かされ、配分者役の被験者は一定額の初期所得が与えられたうえで、それを被配分者との間でどう配分するかを答えた。最終的な報酬額は配分者の決定した額と参加報酬を加算した額となる。被験者の数は総勢で 208 人、このうち男子が 140 人、女子が 68 人である。またこの中の 4 名の参加者は Web アンケートに答えないうちに当日現れた。本来は望ましくないがゲームの構造上参加者を偶数にする必要性からこれを受け入れ、のちに RSES にかかわる検証ではそのデータを分析から除外している。

### 4. 研究成果

#### (1) RSES の傾向

本研究で RSES の平均値は 23.9 であった。男女差を見ると男子の方がやや高い (男子 24.04、女子 22.65) が、ウィルコクソン検定ではおいて 5% 水準の有意差には達しない ( $z=1.67$ ,  $p=0.09$ ,  $n=204$ )。質問間の内的整合性を示すクロンバックの  $\alpha$  は 0.849 であった。

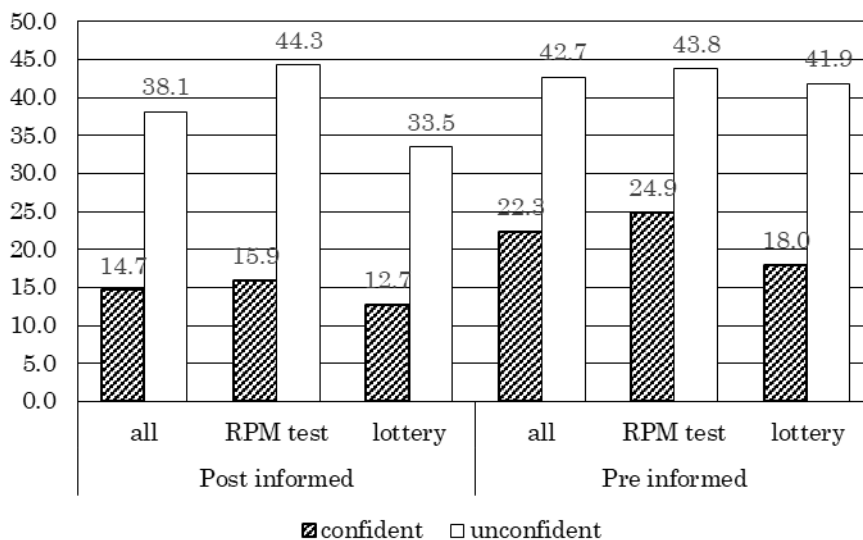
#### (2) 自信と再分配選好

自分が配分者になるだろうという予想をするか否かと、配分選好にはきわめて強い相関が観察された。配分者になった 104 名のうち、自分がタスクのスコアで相手に勝利し、配分者になれると予想したものは 48 人、逆になれないと予想するものは 56 名いた。自分が勝利すると予想した被験者を以下では自信家と呼ぶことにする。自信家の配分者の平均の配分の割合は 14.7%、非自信家の配分者の配分割合は 38.1% だった。 ( $t=3.68$ ,  $p=0.0004$ ) この差は、タスクが知能テストの被験者とくじの被験者に分けて分析しても同様の結果となる。タスクが知能テストの場合、自信家の配分者は、より高い能力を持つ自分が、より高いパフォーマンスを挙げる

であろうと予想し、実際にそれが実現したので、自分がより多く受け取るのは当然であると考ええる。すなわち equity 基準に基づいてそうしていると考えることができる。しかしタスクがくじでも、自分が勝つと予想した自信家たちはより利己的な再分配を行っている。この結果が示すのは、自分の優位な立場が全くの偶然によるものと知っている場合でも、自信家は他者に対して鷹揚な態度をとらないという結果である。

自信家はもともと利己的な配分を好むのだろうか。それとも実際に自分が配分者になったという事実があって初めて利己的になるのだろうか。本研究では、被験者に自分が配分者になれたか否かの情報を与える前に、もし配分者になれたらどうするかについて尋ねている。その結果が Figure 1 の Pre informed のグラフである。ここからみてもわかるように、自信家は、自分が配分者になれるとわかる前から、非自信家比べて自分に高い割合の分配を表明する傾向がある。

Figure 1: Redistribution preferences of confident and unconfident donors



### (3) RSES と再分配選好、RSES と自信の関係

Rosenberg (1965) は、自尊感情は2つの異なった側面があることを指摘している。ひとつは個人が自分は「とてもよい (very good)」と感じる側面であり、もうひとつは、自分は「これでよい (good enough)」と感じる側面であるという。RSES で測っている自尊感情は、後者の「これでよい」と感じる程度である。したがって、他者と比べて自分が優れたパフォーマンスを示したかどうかの予測と、RSES は必ずしも連動するとは限らない。しかし本研究の結果によると自信家かどうかと、RSES との相関は極めて明確である。ロジスティック回帰分析の結果は、RSES の指標値が高いほどに、自分が配分者になれるという予想をしやすいという相関を有意に見出す (Table 1.a)。また、RSES と実際の配分割合の相関も明確である。すなわち、自尊感情の高い配分者ほど他者への配分割合が低くなるのである (Table 1.b)。

Table 1: Relationship between RSES and redistribution preferences/expectations

	objective variable							
	a. confident expectation			b. redistribution preference				
	estimate	s.d.	t-value	estimate	s.d.	$\chi$ -square		
intercept	-3.51	(1.06)	11.06	**	57.2	(14.5)	3.92	**
RSES	0.14	(0.04)	10.63	**	-1.3	(0.60)	-2.13	*
r-square	0.09			0.04				
n	103			103				

Note: RSES: score of Rosenberg self-esteem scale, redistribution preference: ratio of redistribution amount to maximum possible redistribution amount. confident expectation: expected to win=1, to lose=0. The numbers in parenthesis are standard deviations. ^:  $p < 0.1$ , \*:  $p < 0.05$ , \*\*:  $p < 0.01$ .

再分配選好には自信家か否かや RSES の他に、性差、初期所得の差を生む要因 (本実験ではタスクが知能テストかくじか) 実験への参加経験など複数の可能性がありうる。それらの要因を説明変数として用いた回帰分析を行った。自信と RSES は代替的であるため、説明変数として自信を用いる分析と、その代わりに RSES を用いる分析の2種類を行ったが、いずれにおいても、

有意な説明要因は RSES もしくは自信と実験経験数であり、性差やタスクの影響は説明変数として自信を用いた分析において、交差項にわずかに確認されるのみであった。

自信家であることは、再分配選好に対して非常に強い説明力を持ち、実験経験以外のほかの説明変数を圧倒してしまう。RSES はわずかに劣るがこれに準ずる説明力を持つ。自信家であることと RSES が非常に強く相関することはすでに述べたが、性差やタスク、経験などの他の要因は影響するだろうか。これを検証する回帰分析の結果は自信が RSES のみならず、性差、タスク、経験にもある程度影響されていることを示した。自信が再分配選好において突出して強い説明力を持つのは、それが様々な説明変数を反映しているためとも考えられる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

1. 飯田善郎 (2019) 「z-Tree の contracts table の特性とその応用」京都産業大学論集 社会科学系, 36, 157-176. (査読あり)

[https://ksu.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_action\\_common\\_download&item\\_id=10288&item\\_no=1&attribute\\_id=22&file\\_no=1](https://ksu.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=10288&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1)

2. Yoshio Iida and Chrisiana Schwierer (2016) "Contributing for myself, but free-riding for my group?", German Economic Review 17(1), 36-47. (査読あり)

〔学会発表〕(計 3 件)

1. 飯田善郎「連続時間公共財実験における協調を導く要因の検証」, 実験社会科学コンファレンス, 関西大学, 2017 年 10 月 21 日

2. 飯田善郎 "z-Tree" 高知工科大学フューチャーデザイン研究センターフューチャーデザイン実験ラボラトリオープニングワークショップ, 高知工科大学, 2017 年 2 月 20 日

3. 飯田善郎 「被験者実験の経験者と未経験者は異なるか：公平感の視点から」 第 20 回実験社会科学コンファレンス, 同志社大学, 2016 年 10 月 29 日

〔図書〕(計 1 件)

〔その他〕

ホームページ等

1. Yoshio IIDA, "Self-Esteem, Confidence, and Redistributive Preferences" 京都産業大学経済学部ディスカッションペーパー, 2019-2,

<https://www.kyoto-su.ac.jp/faculty/ec/kenkyu/dis.html>

2. Yoshio IIDA, "Confidence, Power and Distributive Preferences" 京都産業大学経済学部ディスカッションペーパー, 2018-01Rev

<https://www.kyoto-su.ac.jp/faculty/ec/kenkyu/dis.html>

## 6. 研究組織

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。